The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	杜仁傑の文学論
Author(s)	陳, 文輝
Citation	中国研究集刊. 2009, 48, p. 96-115
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61215
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　麗号（総四十八号）平成二十一年六月　九六―一一五頁

杜仁傑の文学論

陳　文輝

一　杜仁傑の「遺山先生文集後序」

散曲の傑作「莊家不識勾欄」の作者として名を知られる杜仁傑は、彼独自の文学観を語った散文を一篇残している。先輩であり師でもあった元好問が死去した後、その文集がはじめて上梓される際に、序文として寄せた文章がそれである。

今日、我々が目にすることのできる元好問『遺山先生文集』の最古の版本は、明の弘治戊午（一四九八年）に河南の監察御史・李瀚が刊行したというもので、『四部叢刊』に収める本である。儲巏なる文人の手になる序文(注1)によれば、この『遺山先生文集』四十巻は、礼部の程公（未詳）の元より手に入れた「遺山集」の秘本を儲巏が抄録し、監察御史・李瀚の出資を得て版刻したというが、文集の冒頭には元好問の後輩であった李治や徐世隆の「序引」が附されており、たとえば李治の序は次のようにいう。

不幸遘疾而沒。其遺文數百千篇藏於家，雖有副墨而洛誦者，率不過什得一二。其所謂大全者，曾莫見焉。……東平嚴侯弟忠傑……獨能求得其全編，將鋟之梓，且西走書數百里，命余序引。……中統三年陽月　封龍山人李治序。

（元好問）不幸にして疾に遘いて沒す。その遺文數百千篇、家に藏せらる。副墨ありて洛に誦する者ありと雖も、率ね什に一二を得るに過ぎず。その所謂大全なる者、曾て見る莫し。……東平嚴侯の弟忠傑……獨り能く求めてその全編を得たり。將にこれを梓に鋟まんとし、且つ西に書を數百里に走らせて、余に序引を命ず。……中統三年（一二六二年）陽月、

封龍山人李治序す。

ここにいう東平厳侯とは、山東東平の軍閥厳忠済である。元好問が一二五七年に死去した後、厳忠済の弟・厳忠傑が彼の遺稿をかき集め、中統三年に東平で上梓したのが恐らく最初の『遺山先生文集』であった。礼部程公が蔵したという「秘本」とは恐らくこの「中統本」であり、それを儲巏が抄録し、当時かれらが見ることのできた遺山の詩文と校合し補完して刊行したのが『四部叢刊』本『遺山先生文集』だったと推測される。

明の弘治戊午に出版された四十巻の『遺山先生文集』には、李治や徐世隆の序文が冒頭にあるほか、文集の末尾に王鶚の「後引」が置かれ、更にその後に伝記史料等の「附録」一巻が続き、最終葉に「遺山先生文集後序」がある。この「後序」が本稿の扱う杜仁傑の文学論なのだが、杜仁傑が元好問の後輩で『遺山先生文集』にも言及があること、東平厳氏が杜仁傑の庇護者でもあったこと等を考え合わせるならば、この「序」は中統三年に上梓された原刻『遺山先生文集』に附されていたものであると推測される。当初、杜仁傑の「序」が弘治本と同じ位置に置かれていたか否かは定めがたいが、李治や徐世隆、王鶚の場合と同様、恐らく厳忠傑の求めに応じて書かれたものであろう。

杜仁傑の「後序」は次のような内容である。後の議論の都合上、いくつかの段落に分けて示す。

自有書契以來，以文字名世，得其全者幾人耳。六經諸子，在所勿論。姑以兩漢而下，至六朝及隋唐前宋諸人論之，上下數千載間，何物不品題過，何事不論量了，大都幾許不重複。字凡經幾手，左撏右撦，横安竪置，搓揉亦熟爛盡矣。惟其不蹈襲，自成一家者爲得耳。噫，後之秉筆者，亦訒乎其爲言哉。

今觀遺山文集，又別是一副天生爐鞴，比古人轉身處，更覺省力。不使奇字，新之又新。不用晦事，深之又深。但見其巧，不見其拙。但見其易，不見其難。如梓匠輪輿，各輸技能，可謂極天下之工。如肥濃甘脆，疊爲餖飣，可謂併天下之味。從此家跳出，便知籍湜之汗流者多矣。必欲努力追配，當復積學數世，然後再議。

曩在河南時，辛敬之先生嘗爲余言，「吾讀元子詩，正如佛說法云，吾言如蜜，中邊皆甜」。此論頗近之矣。雖倡優，駔儈，牛童，馬走聞之，莫不以爲此皆吾心上言也。若夫文之所以爲文，亦安用艱辛奇澀爲哉。敢以東坡之後，請元子繼，其可乎。不識今之作者以爲如何。或者曰「五百年後，當有揚子雲復出。子何必喋喋乃爾」。

濟南杜仁傑善甫序。

書契有りて自り以來、文字を以て世に名をしられ、その全きを得し者は幾人かあるのみ。六經・諸子は論ずる勿き所に在り。姑くは兩漢より下り、六朝及び隋唐・前宋の諸人に至るを以てこれを論ずれば、上下數千載の間、何物か品題し過ごさざる、何事か論量し了さざる、大都くは幾許か重複せざる。文字は、凡そ幾手を經て、左に撏き右に搘き、横に安き豎に置き、搓揉して亦た熟爛し盡せり。惟だ其れ蹈襲せず、自ら一家を成す者のみを得たりと爲す。噫、後の筆を秉る者、亦た訒なるかな、其れ言を爲すに。今、遺山文集を觀るに、又た別に是れ一副の天生の爐鞴にして、古人の身を轉らせし處に比して、更に省力なるを覺ゆ。奇字を使わずして、これを深めるに又に深し。但だ其の巧を見て、其の拙を見ず。但だ其の易きを見て、其の難きを見ず。梓匠・輪輿の各おの技能を輸すが如く、天下の工を極むと謂う可し。肥濃と甘脆と、疊ねて餖飣を爲すが如く、天下の味を併(あわ)すと謂う可し。此家の跳出して從り、便ち籍・湜(張籍、皇甫湜)の汗流することの多きを知る。必し努力して追配せんと欲すれば、當に復た學を數世に積みて然る後に再び議すべし。

曩に、河南に在りし時、辛敬之先生、嘗て余の爲めに言えり、「吾、元子の詩を讀むに、正に佛の説法の『吾が言は蜜の如く、中邊も皆な甜し』と云うが如し」と。此の論、頗るこれに近し。倡優・駔儈・牛童・馬走のこれを聞くと雖も、此れ皆な吾が心上の言なりと以爲わざるはなし。若し夫れ文の文爲る所以は、亦た安くんぞ艱辛奇澀を用って為さんや。敢て東坡の後を以てすれば、元子に請いて繼がしむるも、それ可ならんか。今の作者、如何に以爲うかを識らず。或る者曰く「五百年の後、當に揚子雲の復た出ずる有るべし。子、何ぞ必ず喋喋たること乃爾きか」と。

濟南の杜仁傑善甫、序せり。

段落ごとに、その論点を追ってみよう。

まず第一段落で、杜仁傑は「字凡經幾手，左撏右搘，横安豎置，搓揉亦熟爛盡矣（文章というものは何人もの人たちの手を経る過程で、右に引いたり左に引いたり、横に置いたり縦に置いたり、あれこれ手垢にまみれて腐り果てている）」と述べ、「惟其不蹈襲、自成一家者爲得耳」、すなわち過去の伝統を踏襲せず新しい表現を獲得す

ることこそ文学の理想だと述べている。

ここにいう「不蹈襲、自成一家」とは、もちろん杜仁傑がはじめて唱えたものではなく、早くには唐の韓愈が同様のことを唱えていた。たとえば、韓愈「答劉正夫書」（『韓昌黎文集』巻十八）は次のようにいう。

若聖人之道，不用文則已，用則必尚其能者。能者非他，能自樹立不因循者是也。有文字來，誰不爲文。然其存於今者，必其能者也。

若し聖人の道、文を用いざる時は則ち已んぬ。用うるときは則ち必ず其の能くする者を尚ばん。能くする者は他に非ず、能く自ら樹立して因循たらざる者、是れなり。文字有ってより來、誰か文を爲らざる。然れども其の今に存せる者は、必ず其の能くする者なり。

韓愈がいう「自ら樹立して因循たらざる者」が「自成一家」と同義であること、明らかだろう。韓愈はまた、「南陽樊紹述墓誌銘」（『韓昌黎文集』巻三十四）の中で「惟古於詞必己出、降而不能乃剽賊（惟だ古は詞においては必ず己より出す、降りて能くせざるは乃ち剽賊なり）」ともいい、「能くせざるもの」「因循たる」もの、すなわち「蹈襲せず、自ら一家を成す」ことのできない者を「剽賊」としたのである。彼のこのような考え方は後代の文人達に引き継がれ、その影響は金朝時代にも及んだ。たとえば、元好問の師でもあり、金朝期の文壇で主導的な役割を果たした礼部尚書兼侍讀学士の趙秉文は、「答李天英書」（『閑閑老人滏水文集』巻十九）の中で次のようにいう。

足下之言，措意不蹈襲前人一語，此最詩人妙處。然亦從古人中入，……盡得諸人所長，然後卓然自成一家。非有意於專師古人也，亦非有意於專擯古人也。

足下の言、意を前人の一語を蹈襲せざるに措く。此れ最も詩人の妙なる處なり。然れども亦た古人に從いて中入し、……盡く諸人の長ずる所を得、然る後に卓然として自ら一家を成す。專ら古人を師とするを有意うに非ず、亦た專ら古人を擯けるを有意うに非ず。

趙秉文は「古人に從いて中入し、……盡く諸人の長ずる所を得」と述べ、その議論は韓愈や杜仁傑と必ずしも同じではないが、その文学的目的が韓愈や杜仁傑と同様に「卓然として自ら一家を成す」点にあることは明らか

である。

また、同じく金朝の王若虚は、黄庭堅について、「評東坡山谷四絶」（『滹南遺老集』巻四十五）の中で「山谷於詩每與東坡相抗，門人親黨遂謂過之、而今之作者亦多以爲然（山谷は詩において毎に東坡と相い抗う。門人・親黨は遂にこれに過ぐと謂い、今の作者も亦た多くは以て然りと爲す）」と述べ、その後に自作の「戯作四絶」を置いて、第四首で次のようにいう。

文章自得方爲貴　衣鉢相傳豈是真
文章　自得して方（はじ）めて貴しと爲す　衣鉢　相い伝えるも豈に是れ真ならんや

「能自樹立不因循」「自成一家」という表現こそ使われないが、ここにも「前人の真似・模倣を排して自ら一家を成す」べきだとの考え方がみられる。杜仁傑のいう「惟だ其れ蹈襲せず、自ら一家を成す者のみを得たりと爲す」とは、中唐の韓愈を継承しつつ歴代さかんに議論されてきた問題を、多少表現を変える形で述べたものといえるだろう。

「後序」の第二段落においては、杜仁傑は元好問の作風をわかりやすく解説する。

ここで最も注目すべきは、「別是一副天生爐鞴，比古人轉身處，更覺省力」という言葉ではあるまいか。「別是」は「別に」、「天生」は「生まれながらの」、「爐鞴」は鍛冶に用いる「ふいご」、「轉身」は現代語の「翻身」と恐らく同意で、「振り返る、引き返す」の意であり、「省力」は「手間が省ける」の意である。全体として「元好問の文才は生まれながらのふいごであり、古人が努力して求めた「文学の方向転換」よりも更に軽々と「方向転換できた」の意味だと思われる。ここにいう「爐鞴」とは、伝統的なことばを溶解し、そこから新たな言葉を作りあげる溶鉱炉のようなものを恐らく指しているだろう。

杜仁傑がいう「爐鞴」という比喩から我々がただちに連想するのは、黄庭堅がいう「點鐵成金」ではあるまいか。黄庭堅は「答洪駒父書」（『豫章黄先生文集』巻十九）の中で次のように述べている。

古之能爲文章者，真能陶冶萬物，雖取古人之陳言入於翰墨，如靈丹一粒，點鐵成金也。
古の能く文章を爲す者、真に能く萬物を陶冶す。古人の陳言を取りて翰墨に入るると雖も、靈丹の一粒の如く、鐵を點じて金と成すなり。

黄庭堅が唱える「點鐵成金」とは、錬金術が鉄を金に変えるように、「古人の使いふるした言葉」でも使い方ひとつで新しい光を放ち得ることをいうが、これを言い換

えれば、過去を「踏襲」しつつ「自ら一家を成す」方法を説くもの、と考えることが可能だろう。黄庭堅にとっても、韓愈と同様「能く自ら樹立して因循せず」が文学の理想であった。だが、古人によってすでにあらゆることが述べられている以上、「今の人」はその「陳言」を用いるしかない。そこで黄庭堅は、「陳言」を「陶冶」して「翰墨」にいれる「點鐵成金」することを説いたのである。杜仁傑がいう「別是一副天生爐鞴，比古人轉身處，更覺省力」とはまさにその言い換えに過ぎないのである。「別是」という言葉にしても、「古人とは別に」というより「黄庭堅とは別に」としてもいいほどに、黄庭堅のいう「點鐵成金」を意識した表現になっている。杜仁傑の言わんとする所、元好問が古人の「陳言」を金に変える生来の「爐鞴」をもっており、黄庭堅などよりもはるかに軽々と、理想の別天地を打ち立てた、ということであろう。また別天地とは、恐らく杜仁傑が理想とする文学であったと思われる。元好問がそのような境地に達したと、杜仁傑は考えていたのである。

「後序」の最後の段落においては、前段における元好問の作風を前提にして、杜仁傑はさらに直接的に文学の理想を述べ、「若し夫れ文の文爲る所以は、亦た安くんぞ艱辛奇澀を用って為さんや」という。「艱辛奇澀を用いない」とは必ずしも解りやすい表現ではないが、前文にいう「倡優・駔儈・牛童・馬走のこれを聞くと雖も、『此れ皆な吾が心上の言なり』と以爲わざるはなし」を参照するならば、晦渋で難解な表現を避け、万人普遍の感情を、誰にでも理解できる平明な言葉で説くことをいうだろう。「倡優、駔儈、牛童、馬走」とは、いうまでもなく社会的に低い階層にある人たちをいい、その人たちの心の中にもある感情を彼らにわかる言語で述べることが、すなわち「亦た安くんぞ艱辛奇澀を用って為さんや」であると考えられるからである。

杜仁傑のここでの表現は、宋・恵洪『冷齋夜話』巻一に収める白居易の次の逸話をただちに連想させる。

白樂天每作詩，令一老嫗聽之。問曰「解否」。嫗曰「解」則録之，「不解」則易之。故唐末之詩近於鄙俚。

白樂天、詩を作る毎に、一老嫗をして之を聴かしむ。問いて曰く「解するや否や」と。嫗の「解す」と曰わば則ち之を録し、「解さず」といわば則ち之を易う。故に唐末の詩は鄙俚に近し。

白居易は、無学な老嫗に自分の詩を聞かせ、老嫗が意味を解さない部分は書き改めた、というのである。『冷齋夜

話』が記録するこの逸話は、『墨客揮犀』巻三や『孔子談苑』巻五にもみえるが、『詩人玉屑』巻八「鍛煉」はその信憑性を疑って次のようにいう。

樂天詩雖涉淺近，不止盡如冷齋所云。……惠洪乃取而載之詩話，是豈不思詩至於老嫗解，烏得成詩也哉。

樂天の詩は淺近に渉ると雖も、止だ盡くは冷齋の云う所の如きにあらず。……惠洪、乃ち取りて之を詩話に載するも、是れ豈に思わざらんや、詩は老嫗の解するに至れば、詩と成るを得る烏きを。

『詩人玉屑』は、無学な老嫗が理解できる事柄だけでは詩は成り立たないということを述べている。この見解は、それなりに的を射たものである。しかし、杜仁傑がここで述べようとしていることは『詩人玉屑』の観点と多少異なるだろう。杜仁傑が言いたいのは「詩の目的は人類普遍の感情を述べる点にあり、その達成に必ずしも晦渋な表現は必要ない。また、そのことが達成されればその詩は万人に理解可能である」ということである。こうしたことを杜仁傑は「倡優・駔儈・牛童・馬走のこれを聞くと雖も、『此れ皆な吾が心上の言なり』と以爲わざるはなし」という表現で述べたのである。

また、この段落で杜仁傑は「敢て東坡の後を以てすれば、元子に請いて繼がしむるも、それ可ならんか」と述べる。これは蘇軾の詩風を「蘇學」と呼んで祖述しようとした金朝文学の潮流を前提にして、その蘇軾の衣鉢を継ぐのは黄庭堅等ではなく元好問だったことを述べている。この発言は、元好問に対し極めて高い評価を与えると同時に、「夫れ詩は、子瞻に至ってすら且つ古に近づくこと能わざるの恨み有り。後人に望む所なし」（「東坡詩雅引」、後文参照）と述べた元好問の議論をも踏まえるものでもあった。そもそも本「後序」は元好問の文集に寄せたものであったから、当然のこととして元好問の文学論を意識して書かれているのであるが、元・郝經が「遺山先生墓銘」（『遺山先生文集』附録）の中で次のように述べるように、元好問は金末元初の文壇をリードした「宗師」でもあった。そのことを考えれば、杜仁傑もまた陰に陽に元好問の影響を受けていたと考えていいだろう。

汴梁亡，故老皆盡，先生遂爲一代宗匠，以文章伯獨步幾三十年。銘天下功德者，盡趨其門。

汴梁は亡び（金朝の滅亡をいう）、故老は皆な盡き、先生（元好問）は遂に一代の宗匠と爲る。文章の伯を以て獨歩すること三十年に幾し。天下の功德を銘

せんとする者は、盡く其の門に趨る。

では、元好問が唱えた文学論とは如何なるものであったか。そのことを次の節で検討してみよう。

二　元好問の文学論

まず、すでに前章末に於いて一部を引用した「東坡詩雅引」（『遺山先生文集』巻三十六）を見よう。

近世蘇子瞻絶愛陶柳二家。極其詩之所止，誠亦陶柳之亞。然評者尚以其能似陶柳，而不能不爲風俗所移，爲可恨耳。夫詩至於子瞻，而且有不能近古之恨，後人無所望矣。

近世、蘇子瞻は陶柳（陶淵明と柳宗元）二家を絶愛す。其の詩の止まる所を極むれば、誠に亦た陶柳の亞たり。然れども評者は尚お其の能く陶柳に似て、而も風俗の移す所と爲らざる能わざるを以て、恨む可しと爲すのみ。夫れ詩は子瞻に至ってすら且つ古に近づくこと能わざるの恨み有り。後人に望む所なし。

蘇軾は陶淵明と柳宗元を酷愛し、二人の詩風をよく学んで模倣したが、「風俗の移す所と爲って」、「真に古の理想に回帰すること」はできなかった、というのである。

元好問は、歴代の文学論が常にそうであったように、「建安の風骨」や『詩經』『楚辭』を文学の理想とした。そのことは、彼の若いころの「論詩絶句三十首」（『遺山先生文集』巻十一）の冒頭「漢謠魏什久紛紜、正體無人與細論（漢謠　魏什　久しく紛紜たるも、正體　人の與に細論する無し）」を引き合いに出すまでもなく、彼の文章の隅々にまでいきわたった、中国文学特有の一種の伝統意識だったといえるだろう。したがって、元好問のいう「近古」とは「建安」や「風騒」の詩風に回帰することだと思われるが、「陶・柳の古風」をよく学び得た蘇軾でさえ、「風俗の移す所と爲って」真の「近古」を達成できなかったと元好問は述べる。では、ここにいう「風俗の移す所」とはいかなる意味であろうか。

元好問は、『詩經』「国風」の詩について、友人の作品集に寄せた序文「新軒樂府引」（『遺山先生文集』巻三十六）の中で次のようにいう。

詩三百所載，小夫賤婦幽憂無聊賴之語。時猝爲外物感觸，滿心而發，肆口而成爾。

詩三百の載する所は、小夫・賤婦の幽憂して聊賴する無きの語なり、時に猝かに外物に感觸せられ、心に滿ちて發し、口を肆いままにして成るのみ。

同様の見解は、「陶然集序」（『遺山先生文集』巻三十六）にも見える。

自「匪我愆期，子無良媒」，「自伯之東，首如飛蓬」，「愛而不見，搔首踟躕」，「既見復關，載笑載言」之什觀之，皆小夫賤婦滿心而發，肆口而成，以見取於采詩之官，而聖人刪詩亦不敢盡廢。

「匪我愆期、子無良媒」、「自伯之東、首如飛蓬」、「愛而不見、搔首踟躕」、「既見復關、載笑載言(注2)」の什よりこれを觀るに、皆な小夫・賤婦の心に滿ちて發し、口を肆いままにして成り、以って采詩の官に取らる。而して聖人詩を刪するも亦た敢て盡くは廢さず。

『詩經』の詩の多くは「小夫・賤婦」の言葉だと元好問はいう。ここには、杜仁傑のいう「倡優・駔儈・牛童・馬走のこれを聞くと雖も、『此れ皆な吾が心上の言なり』と以爲わざるはなし」と似た考え方があるといえるだろう。

元好問「陶然集序」はこれに続けて次のようにいう。

後世雖傳之師，本之經，真積力久而不能至焉者，何古今難易不相侔之如是耶。蓋秦以前，民俗醇厚，去先王之澤未遠，質勝則野，故肆口成文，不害爲合理。使今世之小夫賤婦滿心而發，肆口而成，適足以汚簡牘，尚可辱采詩官之求取耶。故文字以來，詩爲難。魏晉以來，復古爲難。唐以來，合規矩準繩尤難。

後世、これを傳えて師とし、これに本づきて經とすと雖も、真に力を積むこと久しくして而かも焉に至ること能わざるは、何ぞ古今の難易の相い侔しからざること是くの如きや。蓋し、秦以前は民俗醇厚にして、先王の澤を去ること未だ遠からず。質の勝れば則ち野たるのみ。故に口を肆いままにして文を成し、理に合すと爲すを害せず。今世の小夫・賤婦をして心に滿ちて發し、口を肆いままにして成さ使むれば、適かに以て簡牘を汚すに足るのみ。尚お采詩の官の取るを求むるを辱なくすべけんや。故に文字以來、詩を難しと爲す。魏晉以來、復古を難しと爲す。唐以來、規矩準繩に合するを尤も難しとす。

すなわち、『詩經』の時代は「先王の澤」からさほど離れていなかったから「民俗は醇厚」であったが、後代になるにしたがって「醇厚」は失われ、小夫・賤婦の言葉からも「合理」は失われた、というのである。すでに示した「東坡詩雅引」にいう「風俗の移す所と爲る」とは恐らくこの意味であり、要するに、古代という「理想の時代」から遠く隔たることによって「民俗の醇厚」に回帰することがますます難しくなったことをいうものと思われる。「陶然集序」において、「故に文字以來、詩を難しと爲す。魏晉以來、復古を難しと爲す。唐以來、規矩準繩に合するを尤も難しとす」と歴史的に展開された議論を宋以後にまで延長すれば、それは当然「後人に望む所なし」（「東坡詩雅引」）という状況以外になかった。元好問は、時代が下れば下るほど「民俗」も「詩」も衰えると考えていたのである。

では、「近代の詩」はどうあるべきだと元好問は考えていたのだろう。「陶然集序(注3)」は更に続けて次のようにいう。

古律、歌行、篇章、操引、吟詠、謳謠、詞調、怨嘆、詩之目既廣，而詩評、詩品、詩説、詩式、亦不可勝讀。大概以脱棄凡近、澡雪塵翳、驅駕聲勢、破碎陣敵、囚鎖恠變、軒豁幽祕、籠絡今古、移奪造化爲工，鈍滯、僻澁、淺露、浮躁、狂縱、淫靡、詭誕、瑣碎、陳腐爲病。「毫髮無遺恨」「老去漸於詩律細」「佳句法如何」「新詩改罷自長吟」「語不驚人死不休(注4)」杜少陵語也。「好句似仙堪換骨、陳言如賊莫經心」、薛許昌語也(注5)。「乾坤有清氣，散入詩人脾。千人萬人中，一人兩人知(注6)」，貫休師語也。「看似尋常最奇崛、成如容易却艱難(注7)」，半山翁語也。「詩律傷嚴近寡恩(注8)」，唐子西語也。子西又言「吾於它文不至蹇澁，惟作詩極難苦。悲吟累日，僅自成篇，初讀時未見可羞處，姑置之，後數日取讀，便覺瑕釁百出。輙復悲吟累日，反復改定，比之前作，稍有加焉。後數日復取讀，疵病復出。凡如此數四，乃敢示人，然終不能工。李賀母謂『賀必欲嘔出心乃已』，非過論也」。今就子美而下論之，後世果以詩爲專門之學，求追配古人，欲不死生於詩，其可已乎。雖然，方外之學，有「爲道日損」之説。又有「學至於無學」之説。詩家亦有之。子美夔州以後，樂天香山以後，東坡海南以後，皆不煩繩削而自合。非技進於道者，能之乎。詩家所以異於方外者，渠輩談道，不在文字，不離文字。詩家聖處，不離文字，不在文字。唐賢所謂「情性之外，不知有文字」云耳。

古律、歌行、篇章、操引、吟詠、謳謠、詞調、怨嘆

と、詩の目は既に廣く、而して、詩評、詩品、詩説、詩式も亦た讀むに勝う可からず。大概ね凡近を脱棄し、塵翳を澡雪し、聲勢を驅駕し、陣敵を破碎し、恠變を囚鎖し、幽祕を軒豁し、今古を籠絡し、造化を移奪するを以て工と爲し、鈍滯、僻澁、淺露、浮躁、狂縱、淫靡、詭誕、瑣碎、陳腐を病と爲す。「毫髮も遺恨無し」「老い去りて漸く詩律に細やかなり」「佳句の法や如何」「新詩　改め罷りて自から長吟す」「語　人を驚かさずんば死すとも休まじ」とは杜少陵の語なり。「好句は仙に似て換骨に堪え、陳言は賊の如く心を經る莫し」とは薛許昌の語なり。「乾坤に清氣有り、散じて詩人の脾に入る。千人萬人の中、一人兩人のみ知る」とは貫休師の語なり。「看て尋常の似きは最も奇崛、成りて容易なるが如きは却て艱難」とは半山翁の語なり。「詩律は傷ましむること嚴にして寡恩に近し」とは唐子西の語なり。子西は又た言う、「吾、它文において蹇澁に至らず、惟だ作詩のみ難苦を極めり。悲吟すること累日、僅かに自ずから篇を成す、初め讀む時、未だ羞ず可き處を見ず、姑くこれを置き、後數日にして取りて讀めば、便ち瑕釁百出するを覺ゆ。輙ち復た悲吟すること累日、反復改定す。これを前作と比ぶれば、稍や加うる有り。後數日、復た取りて讀むに、疵病復た出ず。凡そ此の如くすること數四、乃ち敢て人に示す、然れども終に工たること能わず。李賀の母は謂う、『賀は必らず心を嘔出せんと欲して乃ち已む』と。過論に非ざるなり」。今、子美より下に就きてこれを論ずるに、後世、果して詩を以て專門の學と爲し、古人に追配せられんことを求め、詩に死生せざらんと欲するも、已むべけんや。然りと雖も、方外の學に、「道を爲すは日び損なう」の説有り。又た「學は無學に至る」の説有り。詩家も亦た之れ有り。子美の夔州以後、樂天の香山以後、東坡の海南以後は、皆な繩削に煩わされずして自ら合するなり。技の道に進む者に非ざれば、これを能くせんや。詩家の方外と異なる所以の者は、渠の輩は道を談ずること、文字に在らずして、文字を離れず。詩家の聖處は、文字を離れずして、文字に在らずとするなり。唐賢の所謂「情性の外、文字有るを知らず」というのみ。

元好問の以上の議論でまず重要なのは、「小夫・賤婦」の心や口から発せられる言葉が詩となり得る、という考え方を彼が一切とっていないことである。彼が述べるのは「詩の目が廣がり、詩評、詩品、詩説、詩式が完備した

近代」のことである。詩は、もはや「小夫・賤婦」のためのものではなく、「後世の、詩を以て専門の學と爲し、古人に追配せられんことを求め、詩に死生せざらんと欲するも已むべからざる者」、すなわち「専門の詩人」のためのものである。元好問のこの立場は、杜仁傑よりもむしろ「詩は老嫗の解するに至れば、詩と成るを得る烏し」とした『詩人玉屑』に近いといってよい。

もっとも、元好問の議論の中でも、「心に滿ちて發し、口を肆いままにして成」しても、詩が詩たり得る可能性を否定しているわけではない。彼は、仏教徒たちがいう「學は無學に至る」という説を引き合いに出し、杜甫の夔州以後、白居易の香山以後、蘇軾の海南島以後の詩が「繩削に煩わされずして自然と理に適った」ものになっていることを指摘する。これなどは「心に滿ちて発し、口を肆にして成」った詩とすることができるだろう。ただし、その後に元好問が「技の道に進む者に非ざればこれを能くせんや」と述べるように、「口を肆にして理に合する」のは杜甫や白居易、蘇軾といった才能の長年の研鑽の結果なのである。

「近代の詩人」が直面している以上のような苦悩を踏まえ、文学に志す者が進むべき道を元好問は次のように述べている。

龜蒙，高士也，學即博贍，而才亦峻潔，故其成就卓然爲一家。宋儒謂唐人工于文章而昧於聞道，其大較然，非獨一龜蒙也。至其自述云「少攻詩歌，欲與造物者爭柄，遇事輒變化，不一其體裁，始則陵轢波濤，穿穴險固，囚鎖怪異，破碎陣敵，卒之造語平淡而後已」者，信亦無愧云。

龜蒙は高士なり。學は即ち博贍にして、才も亦た峻潔。故に其の成就は卓然として一家を爲す。宋儒は「唐人は文章に工にして道を聞くに昧し」と謂う。其れ大較然り。獨り一龜蒙に非ざるなり。其の自述に「少くして詩歌を攻め、造物者と柄を爭そわんと欲す。事に遇えば輒ち變化し、其の體裁を一にせず。始めは則ち波濤を陵轢し、險固を穿穴し、怪異を囚鎖し、陣敵を破碎するも、これを造語の平淡なるに卒えて而る後に已む」と云うに至りては、信に亦た愧ずる無きなり。

右は、『遺山先生文集』巻三十四に収める「校笠澤叢書後記」という文章の一部であるが、ここにいう「これを造語の平淡なるに卒えて而る後に已む」とは単に陸亀蒙の自述にとどまるものではなく、元好問自身の格闘と諦念

の結果でもあったろう。すでに見た「陶然集序」の中で元好問が引用した王安石の言葉、「看て尋常の似きは最も奇崛たり、成りて容易なるが如きは却て艱難たり」と共通した認識がここにはある。

元好問は、古代に回帰することをもちろん文学の理想とした。だが、そのことが容易ならざる時代に生まれた「近代の詩人」には、詩の妄執にとり憑かれて「苦吟」する道しか残されていない。「苦吟」の果てに、もしその人に才能があれば、「平淡」に至って「尋常」程度の詩は成すことができるかもしれない。これが元好問のたどり着いた結論だったのである。

三　杜仁傑と元好問

元好問の文章の中には杜仁傑の詩を評したものがある。まず、その文章を見てみよう。

麻信之，杜仲梁，張仲經，正大中同隱内鄉山中，以作詩爲業。人謂東南之美，盡在其是矣。予嘗竊評之：仲梁詩如偏將軍將突騎，利在速戰，屈於遲久。故不大勝則大敗。

麻信之、杜仲梁、張仲經、正大中、同に内鄉山中に隱れ、作詩を以て業と爲す。人謂えらく、東南の美は盡く其れ是に在りと。予、嘗て竊かにこれを評す。仲梁の詩は偏將軍の突騎を將いるが如し。利は速戰に在りて、遲久に屈す。故に大勝せずんば則ち大敗す。

右は「麻杜張諸人詩評」（『遺山先生文集』巻三十九）という文章で、麻信之、杜仲梁、張仲経という三人の後輩の詩を批評したものである。この中で元好問は、杜仁傑の才能を認めつつもその短所を見据え、作詩を戦場における戦術にたとえて「偏將軍」格とする。文中にいう「突騎を將いて利は速戰に在り」とは、言いかえれば「奇襲作戦」とでもいえようか。これが正々堂々の正面攻撃でないことは言うまでもない。つまり、伝統的な手法による正攻法ではなく「奇襲」であるため、「大勝せざれば則ち大敗」という二つに一つしかない、というのである。この比喩を杜仁傑の文章に当てはめた場合、彼の文章の特徴や元好問のそれとの違いをどのように要約したら良いのだろう。

陸亀蒙の「これを造語の平淡なるに卒えて而る後に已む」という言葉を引いて詩人の苦悩を述べた元好問は、郝經が「遂に一代の宗匠と爲る」（前掲）と述べたように、

中国文学の伝統を一身に引きうけ、伝統への回帰を修練と努力で達成しようとした、いわば正攻法の人であったろう。これに比べる時、杜仁傑の場合は、「遺山先生文集後序」から推察する限り、少なくとも二つの差異を認めることができる。その第一は、伝統への回帰を、杜仁傑は元好問以上に単純に考えていた節があることである。

杜仁傑は「遺山先生文集後序」のなかで「倡優・駔儈・牛童・馬走のこれを聞くと雖も、『此れ皆な吾が心上の言なり』と以爲わざるはなし。若し夫れ文の文爲る所以は、亦た安くんぞ艱辛奇澀を用って為さんや」と述べていた。ここにいう「安くんぞ艱辛奇澀を用って爲さんや」は、元好問のいう「これを造語の平淡なるに卒えて而かる後に已む」と恐らく同義であろうが、元好問の場合は「苦吟」の果てに到達する「平淡」であったのに対し、杜仁傑の場合は「倡優・駔儈・牛童・馬走」の「心上の言」に忠実であるが故の「平淡」であるように思われる。つまり、「小夫・賤婦」が「心に滿ちて發し、口を肆いままにして成した」「詩三百篇」に文学の理想があるとするなら、杜仁傑はより直線的にそれへ回帰することができると考えていたのではあるまいか。元好問が杜仁傑を「偏將軍」と評するのは、彼のこうした点を捉えて揶揄した可能性もあるだろう。

その第二は、「遺山先生文集後序」に見られる独特の文体である。

この「後序」を読んで誰しも感じるのは、文章全体に見られる文言と白話が入り混じった独特の「味わい」であろう。たとえば「何物不品題過，何事不論量了，大都幾許不重複」という部分に着目するなら、動詞の「品題」「論量」の後に白話的な補語の「過」や「了」が使われ、「およそ」「だいたい」の意として「大都」の語が、現代語の「多少」の意として「幾許」の語が用いられている。これらの白話語彙は、一部のものはすでに唐代から用いられるとはいえ、伝統的な内容を展開する文章の中に混入されることによって、実に新鮮な印象を読者に与えている。

また、「字凡經幾手、左撏右搘、横安豎置、搓揉亦熟爛盡矣」という表現はどうだろう。「左撏右搘、横安豎置」はまるで四六文のような対句だが、そこに使われる語彙は「撏」「搘」等の俗語であるし、「左」「右」「横」「豎」と畳み掛けるのは実に通俗的印象を与えるのではないだろうか（「後序」と四六文との関連は「但見…不見…、但見…不見…」「如梓匠…可謂…如肥濃…可謂…」といった対句表現にも見られる）。また、たとえば「搓揉」にしても、元朝期以前の古典文献資料には用例が見つからず、

元曲等の白話文学資料の中でしか使われない語彙なのである(注9)。

さらに、「後序」の中核部分においても「一副天生爐鞴、比古人轉身處、更覺省力」という表現が見られたが、ここにいう「轉身」「省力」も白話語彙であったし、「點鐵成金」を「一副天生爐鞴」に喩えるのも極めて卑近な比喩と言えるだろう。こうした語彙や比喩が、『論語』「仁者、其言也訒（仁者は其の言や訒）(注10)」に出典をもつ「亦た訒なるかな、それ言を爲すに」という表現や、蘇軾「潮州韓文公廟碑」（『經進東坡文集事略』巻五十五）を出典とする「便ち籍湜の汗流を知る者は多し(注11)」という表現と相前後して現れるのである。杜仁傑は恐らく、彼が説明したいと思う論点を、文語を用いた伝統的な文脈と白話（口語）を用いたより平明な文脈の両面から、委曲を尽くして展開しているのである。そして、杜仁傑の文章に見られるある種の卑近さ、「口語性」こそが、彼の「近古」の実質だったのではあるまいか。つまり、杜仁傑も元好問と同様に「詩三百篇」へ回帰することを文学の理想としたが、元好問よりも単純に、杜仁傑はそれを文体によって達成しようとしたのである。

四　杜仁傑の作品

では最後に、杜仁傑の実作を見ておこう。彼の作品で今日に残されたものはさほど多くなく、詩、詞、散曲ともにそれぞれ数首が現存するにすぎない。その中でここでは、元刊本『草堂詩餘(注12)』に収録される詞二首を紹介しよう。因みに、杜仁傑の詞で現存するのは、この二首のみである。

【太常引】碧樹冰簟午風涼。都是好風光。獨自守空床。淚滴了千行萬行。　別時情意、去時言約、剛道不思量。不是不思量。説着後教人語長。

みどりの簟笥に氷のように冷たいすのこ。夏の午後を渡る風は涼しく、すべては美しく気持ちがいい。なのに、ひとり空のベッドにすわり、ただただ涙にくれる。　別れのときの愛の言葉、約束の言。思い返したりしないと言ったばかり。思い返さないわけじゃなく、口に出したら長くなるだけ。

【朝中措】汴梁三月正繁華。行路見雙娃(注13)。遍體一身明錦、遮塵滿面烏紗。　車鞍似水、留伊無故、去落誰家。爭奈無人説與、新來憔悴因他。

汴梁の三月、繁華の巷で、道を歩いていたら鶯鶯とやらに出くわして、相手は上から下まで錦の着物、烏紗のベールもかわいらしい。　通りを行く車馬はひっきりなし、あんたを引きとめることもせず、今ごろはどこの女の所にしけこんでいるのやら。あんたのせいであたしは近ごろめっきり痩せたと、誰かにことづける手立てもない。

二首はともに閨怨詞である。【太常引】は、後段において女性の口調で「剛道不思量。不是不思量。說着後教人語長」と述べ、恋人を思う女性の複雑な感情を、「思量」の反復表現を用いていきいきと表現する。

また【朝中措】は、幾つかの解釋の可能性がないわけではないが、全体は恐らくこれも閨怨で、「汴梁」の他の女の所に行ったきり音沙汰のない男を思う女の気持ちを歌ったものと思われる。最初の二句「汴梁三月正繁華。行路見雙娃」、特に「雙娃（鶯鶯、ないし燕燕といった名の女、の意であろう）」は、具体的なモデルが実在して詠まれていることを強く感じさせ、杜仁傑が妓女に成り代って作詞したことを思わせる。「留伊無故」という表現から見るに、浮気な客を留めきれず「雙娃」に奪われてしまった妓女の嘆きを歌った詞ではないだろうか。

二首は、「都是」「獨自」「淚滴了」「不思量」「不是」「說着」「後」「遍體一身」「去落」「誰家」「爭奈」「說與」「新來」といった口語表現を多用し、典故のある語をほとんど用いない。全文が女性の言葉を写す「代言体」であり、その内容、表現ともに、「詞」というよりは散曲の「小令」に近いといえるだろう。こうした作品に彼の散曲の先鞭を見ることは容易であり、また「遺山先生文集後序」と共通した表現世界を感得することも不可能ではあるまい。

一方元好問は、生前に自分の作品を整理して『遺山樂府』を刊行したこともあって、現存する詞は少なくない。その中で閨怨詞はあまり数が多くないのだが、比較のために、杜仁傑詞に似た作風のものを選んで見てみよう。

【朝中措】良霄一刻抵千金。孤負百年心。好箇一江春水、深來不似情深。　一天好事、還教容易、著甚消任。煩惱直須寧耐、不成長似如今。

あなたと過ごした春の宵は値千金。百年の恋心にそむいて今はひとり。なんとも、春の大川は愁いをたたえて東流するが、川は深いけど、私の思いの深さには及ばない。　楽しかったあの日は、やすやすと流れ去り、もはや味わうすべもない。苦しみには耐え忍ばなければならないけれども、

まさか今日まで続くとは。

【清平樂】香凝嬌聚。玉立臨春樹。細看司花留意處。都在輕匀淺注。　相逢南陌東城。有情只似無情。説與新來憔悴、鶯兒不解丁寧。

香を凝らし美しさをあつめて、春の木々の中にすっくと立つ花。花神の苦心の跡を細かに見るに、すべては淡い薄化粧。　かつて、都の東や南の路でお会いした。思いがつのればかえって無情を装う。春の思いにやつれたことを伝えたいとは思うけれど、枝に鳴く鶯はねんごろの心を理解しない。

一首目の【朝中措】では、「好箇」「深來」「著甚」「消任」「不成」のように口語的語彙も用いられてはいるが、一方では蘇軾の「春宵一刻直千金、花有清香月有陰（春宵一刻　直い千金、花に清香有り　月に陰有り）（注14）」や李煜の「問君能有幾多愁、恰似一江春水向東流（君に問う　能く幾多の愁いか有ると、恰かも似たり、　一江の春水　東に向って流るるに）（注15）」という句を踏まえた表現も用いられ、単なる閨怨に終わらない、奥行きをもった象徴性を獲得している。また、第二首目の【清平樂】も同様で、後段第三句で「説與新來憔悴」といい、杜仁傑の【朝中措】にある「爭奈無人説與、新來憔悴因他」と極めて類似した表現がとられているにも関わらず、蘇軾【蝶戀花】の「多情卻被無情惱（多情の人は無情の人にかえって惱ませられる）（注16）」や、杜甫「絶句漫興九首」其一にいう「即遣花飛深造次、便教鶯語太丁寧（即（たと）え花の飛ぶことをして深く造次ならしむとも、便ち鶯語をして太だ丁寧ならしむべけんや）（注17）」といった句が換骨奪胎して用いられ、一首全体に深い陰影を与えている。二首ともにどういう機会に詠じられたか明らかでないため、具体的に何をテーマとするかは確定できないが、「惜春の情」に人生の憂愁が託された、宋詞らしい風格をもった作品ということができよう。

杜仁傑は「遺山先生文集後序」の中で、元好問の「手法」を評して「別に是れ一副の天生の爐鞴にして、古人の身を轉らせし處に比して、更に省力なるを覺ゆ」と述べていた。右に示した詞二首などは、杜甫や蘇軾、李煜の詩句を用いつつそこに新しいニュアンスを添え、しかも全体としては宋詞の伝統に忠実な「古典的世界」を形成しており、まさしく「別に是れ一副の天生の爐鞴にして、古人の身を轉らせし處に比して、更に省力なるを覺ゆ」る優れた作品になっている。また、「亦た安くんぞ艱

辛奇澀を用って爲さんや」と評されるに足る平明な表現からなる作品ともいえるだろう。その点で元好問は杜仁傑の賞賛に羞じない大詩人であったが、ただしその味わいは、「倡優・駔儈・牛童・馬走のこれを聞くと雖も、『此れ皆な吾が心上の言なり』と以爲わざるはなし」とするにはふさわしくない複雑な奥行きを備えたものだったのである。「倡優・駔儈・牛童・馬走のこれを聞くと雖も、『此れ皆な吾が心上の言なり』と以爲わざるはなし」とは、杜仁傑自身の理想を元好問に投影して述べたものであった可能性があるだろう。

今日、杜仁傑の作品として残されている詩歌は極めて数少ない。したがって、彼の作風を実作の上から帰納することはほとんど不可能とせざるを得ない。ただ、右に見た詞二首などは彼の散曲と似た味わいをもち、また「遺山先生文集後序」が展開する文学の理想とも合致するように思われる。「遺山先生文集後序」は、何よりその口語を備えた平易な文体が杜仁傑の理想を体現したものであった。右の詞二首も文体の面において「後序」に通じる世界をもつといえるだろう。そして、こうした文学の実現のために、杜仁傑は散曲の創作へと向かっていったと考えられるのである。

散曲は、その通俗性を捉えてしばしば民間の文学として論じられる。このことは決して誤りではない。しかし、杜仁傑の場合は、伝統的な文学観の延長線上に散曲の世界を見ていた可能性がある。「俗文学」とされる散曲や戯作と伝統文学との関係を考える際に、本稿に見てきたような杜仁傑の文学論は大いに意義があるのではないだろうか。

注

(1)『遺山先生文集』に附された「儲太僕先生手簡」の全文は以下のとおりである。

憲旆出巡時，匆匆不克一奉高論，迄今耿耿。昨揚令書至，道執事欲刊遺山先生文集，使來嶧處取之。嶧慕遺山甚篤，嘗以不見全集爲恨。訪之十數年，始得秘本於今禮部程公，錄而藏之，欲托好古者刊行而未得也。乘領雅意，忻喜無量。遂借初本再校一遍。但其中亦有一二處訛缺，緣無它本可證。奈何，奈何。然古書之行於今者，未必皆能完好也。遺山，文章大家，著述贍富，如中州等集不行於世久矣。執事企仰鄉資，汲汲表章之，甚盛舉也。全集四十卷納上，外傳誌題贈諸作乃嶧於它集中輯錄者，亦請並刻之。蓋遺山在當時已爲名人碩士所重，不待後世始知子雲也。須得楷書有典則者另寫潔本，乃可入梓。開下許州規措，

諒承委得人矣。太康吏回謹附狀。秋暑唯惠時珎攝不宣
七月十四日嶧 頓首復省齋李先生行臺執事。

(2)『詩經・國風』「衛風・氓」に「匪我愆期、子無良媒。將子無怒、秋以爲媒」、「不見復關、泣涕漣漣。既見復關、載笑載言」とあり、「衛風・伯兮」に「自伯之東、首如飛蓬。豈無膏沐、誰適爲容」、また「邶風・靜女」に「靜女其姝、俟我於城隅。愛而不見、搔首踟躕」とある。

(3)「陶然集序」は作詩に関わる先人の様々な言説を引用する。例えば、「子西又曰く……非過論也」の部分が宋・唐庚『眉山文集』巻十・雑文「自説」をそのまま引用するように、多くはそうした言説を集めた詩話類からの「又引き」だと思われる。

(4)「毫髪無遺恨」は杜甫「贈鄭諫議十韻」詩(『九家注杜詩』巻十七)にある句。「老去漸於詩律細」は「遣悶戲呈路十九曹長」詩にある句(『杜工部集』巻十四)。「佳句法如何」は杜甫「寄高三十五書記」詩(『杜工部集』巻二)にある句。「新詩改罷自長吟」は杜甫「解悶十二首之七」詩(『杜工部集』巻十五)にある句。「語不驚人死不休」は杜甫「江上値水如海勢聊短述」詩(『杜工部集』巻八)にある句。

(5)「好句似仙堪換骨、陳言如賊莫經心」は現存する薛能の詩作に見当たらない。『新唐書・藝文志』に『薛能詩集』十巻のほか、『繁城集』一巻が著録される。

(6)「乾坤有清氣,散入詩人脾。千人萬人中,一人兩人知」は貫休「乾坤有清氣」詩(『禪月集』巻二)に見える句。

(7)「看似尋常最奇崛、成如容易却艱難」は王安石「題張司業詩」詩(『臨川文集』巻三十一)に見える句。

(8)「詩律傷嚴近寡恩」は唐庚(字子西)「遣興」詩(『宋詩鈔・唐庚眉山詩鈔』巻四十六)に見える句。

(9)『元刊雜劇三十種』關漢卿「詐妮子調風月雜劇」第二折【滿庭芳】に「似你這般狂心記。一番家搓揉人的樣勢。休胡猜人短命黑心賊」とある。

(10)『論語』「顔淵第十二」「司馬牛問仁」。「司馬牛仁を問ふ。子曰く、「仁者は其の言や訒」。

(11)蘇軾『經進東坡文集事略』巻五十五「潮州韓文公廟碑」に「……因爲作詩以遣之,使歌以祀公。其詞曰:公昔騎龍白雲鄉……追逐李杜參翺翔、汗流籍湜走且僵」とある。

(12)ここで言う元刊本『草堂詩餘』とは、元朝の「鳳林書院」が編集した『景元本鳳林書院草堂詩餘』三巻、則ち『精選名儒草堂詩餘』を指す。ここに取りあげたる杜仁傑の二首の作品は、この『精選名儒草堂詩餘』巻上に収める。因みに『景元本鳳林書院草堂詩餘』三巻は、(上海古籍出版社、一九八九年)昌綬、陶湘輯編『景刊宋金元明本詞』に収める。

(13)宋・趙令畤『侯鯖錄』巻五「辨傳奇鶯鶯事」に「僕家有

微之作元氏古艷詩百餘篇、……其詩中多言「雙文」、意謂疊「鶯」字爲雙文也」とある。ここにいう「雙娃」も「雙文」と同様、特定の女性の名前を指していよう。

(14) 東坡云、「春宵一刻直千金、花有清香月有陰。歌管樓臺人寂寂、鞦韆院落夜沉沉」。ただし、此の詩は蘇軾文集には見えないが、宋・楊萬里『誠齋集』巻一一四『詩話』に収め、また、元刊本『千家詩』にも収める。

(15) 李煜【虞美人】「春花秋葉何時了。往事知多少。小樓昨夜又東風。故國不堪回首月明中。○彫欄玉砌應猶在。只是朱顔改。問君還有幾多愁。恰似一江春水向東流。」(『唐宋諸賢絶妙詞選』巻一)

(16) 蘇軾【蝶戀花】「花褪殘紅青杏小。燕子飛時、緑水人家繞(一作曉)。枝上柳綿吹又少。天涯何處無芳草。○牆裏鞦韆牆外道。牆外行人、牆裏佳人笑。笑漸不聞聲漸悄。多情却被無情惱。」(『東坡樂府』巻下)

(17) 『杜詩趙次公先後解輯校』丙帙巻之三「絶句漫興九首」其一「眼見客愁愁不醒、無賴春色到江亭。即遣花飛深造次、便教鶯語太丁寧」の註に、「趙云：即便遣花飛去、此所以爲春之造次也。造次、率爾之意。鶯亦惜花之飛、而其語丁寧稠疊也」とある。杜甫の詩においては鶯鳴き声が「丁寧」であるのに対して、元好問の作品では「丁寧」な語り口を鶯が解さない、とひねった使い方がされている。